

SAN-Ai

社会医療法人 三愛会 広報誌「さんあい」

Vol.37



〔 社会医療法人 三愛会 〕

大分三愛メディカルセンター・三愛総合健診センター

所在地	〒870-1151 大分県大分市大字市1213番地
TEL	097-541-1311
FAX	097-541-5218
病床数	190床
診療科	脳卒中センター、消化器病・内視鏡センター、 運動器センター、救急外傷センター（ER）、人工透析センター、 画像診断センター、リハビリテーションセンター、 救急科・外科・消化器外科・心臓血管外科・呼吸器外科・ 乳腺外科・大腸肛門外科・脳神経外科・整形外科・ 泌尿器科（人工透析）・形成外科・内科・総合診療科・ 消化器内科・呼吸器内科・循環器内科・糖尿病内分泌内科・ リウマチ科・神経内科・放射線科・リハビリテーション科・ 病理診断科・麻酔科
専門外来受付	8:15～11:00/13:30～16:00 ※土曜日は、新患の方のみ 8:15～10:00となります。 ※診療開始時間は診療科によって異なります。
休診日	日曜日・祝日・土曜日午後 ※但し、救急・時間外診療は24時間体制です。
認定施設	二次救急指定病院、 大分DMAT指定病院、DPC対象病院、 日本医療機能評価機構認定病院
HPアドレス	san-ai-group.org



介護保険相談センター さんあい

（大分三愛メディカルセンター内）

TEL	097-542-7409
サービス	居宅介護支援、介護予防居宅介護支援

三愛訪問看護ステーション

（大分三愛メディカルセンター内）

TEL	097-541-7007
サービス	訪問看護、介護予防訪問看護

のつはる診療所

所在地	〒870-1203 大分市大字野津原906番地の1
TEL	097-588-1311
診療科目	外科・内科・整形外科・循環器内科・リハビリテーション科
病床数	19床
サービス	通所リハビリテーション（デイケア）、 介護保険相談センター
HPアドレス	notsuharu-san-ai.com/



三愛呼吸器クリニック

所在地	〒870-1143 大分市田尻419-1
TEL	097-541-2588
診療科目	呼吸器内科・内科
サービス	呼吸リハビリテーション
HPアドレス	kokyu-oita.com



たばるクリニック

所在地	〒870-1154 大分市大字田原936番地1の1
TEL	097-541-2345
病床数	19床
診療科目	外科・内科・消化器外科・リハビリテーション科 整形外科
サービス	訪問看護ステーション
HPアドレス	tabaru-san-ai.com



介護老人保健施設 たばる（たばるクリニック併設）

TEL	097-542-4139
サービス	入所サービス、 短期入所療養介護（ショートステイ）、 通所リハビリテーション（デイケア）
HPアドレス	tabaru-san-ai.com/rouken



グループホームたばる（たばるクリニック併設）

TEL	097-541-5298
サービス	入所サービス
HPアドレス	tabaru-san-ai.com/grouphome



介護老人保健施設 わさだケアセンター

所在地	〒870-1151 大分市大字市字大坪11番地の2
TEL	097-541-6655
サービス	入所サービス、短期入所療養介護（ショートステイ）、 通所リハビリテーション（デイケア）、 訪問リハビリテーション
HPアドレス	wasada-care-center.com



有料老人ホーム さんさん

所在地	〒870-1151 大分市大字市566番地の3
TEL	097-529-5580
サービス	住宅型有料老人ホーム （三愛学童「アイ・ステップ」併設）

さんあいヘルパーステーション

（有料老人ホームさんさん内）

TEL	097-529-5582
サービス	訪問介護、介護予防訪問介護

〔 社会福祉法人 三愛会 〕

特別養護老人ホーム そうだ藤の森

所在地	〒870-1123 大分市大字寒田202番地
TEL	097-567-8822

天領ガーデン・ふれあい館

所在地	〒870-1143 大分市大字田尻高尾783-1
TEL	097-578-7122

特別養護老人ホーム 天領ガーデン

（天領ガーデン・ふれあい館内）

TEL	097-574-7500
-----	--------------



ひとに笑顔を ちいきに“愛”を

社会医療法人 三愛会

社会医療法人 三愛会 広報誌「SAN-Ai」 Vol.37（2025年10月1日発行）

発行元/〒870-1151 大分市大字市1213番地 TEL.097-541-1311 社会医療法人 三愛会 大分三愛メディカルセンター

社会医療法人 三愛会/www.san-ai-group.org/ 三愛総合健診センター/www.kenkou-oita.com

法人設立から55年



History of SAN-Ai 1948~2025

1970	1968	1959	1948
「医療法人社団 三愛会 三愛病院(60床)」として法人化	鉄筋コンクリート造4階建ての 病院を建築	診療所を移転	大分市西部高瀬に 安東有二郎診療所を開設

三愛会の歴史は、
ここから始まった。

1948年 終戦から3年後の1948年7月30日、日本で「医療法」が公布された。『国民は、良質かつ適切な医療の効率的な提供に資するよう、医療提供施設相互間の機能の分担及び業務の連携の重要性についての理解を深め、医療提供施設の機能に応じ、医療に関する選択を適切に行い、医療を適切に受けるよう努めなければならない(6条の2の3)』。医療の根本となる法律ができたこの年、大分市西部の高瀬の地に、「安東有二郎診療所」が開設した。のちの三愛会初代理事長となる、内科医師の安東有二郎(現会長・義父)が「三愛病院」、そして「現」社会医療法人三愛

55年のスタート地点まで



当時の診療の様子(年代不明)



1948年頃の安東有二郎診療所



初代理事長・安東有二郎



約50年前、当時の病院職員たち



三愛病院外観(1976年)

それは、地域の皆さまと
同じ景色に立ち、同じ未来を描き、
共に歩み続けてきた年月でした。

2025年9月3日。三愛会55周年を迎えるにあたり、会長・半澤一邦と理事長・三島康典とで写真撮影を行った。故・安東有二郎が初代理事長として三愛会を設立後、半澤一邦は約36年間の長きにわたって2代目を務めあげ、大分三愛メディカルセンターをはじめとする三愛会各事業所の基盤を盤石なものとしてきた。

三島康典が3代目となったのは、今からちょうど10年前の2015年。三愛総合健診センターの開設などを控え、その後も、たばる事業所(たばるクリニックなど)や三愛呼吸器クリニックの開設、そして大分三愛メディカルセンターの病床再編成の施策など、就任以降さまざまな判断の局面に向かい合ってきた。特に記憶に新しいのは、50周年の年でもあった2020年に始まったコロナ禍。「発熱難民を出してはいけない」という意志のもと、三愛会は新興感

会」の第一歩を踏み出した瞬間だった。

1950年代 1950年代まで、農業や自営業者、零細企業社員など、国民の約3分の1(約3,000万人)が無保険者で社会問題となっていた。1958年、国民健康保険法が制定され、61年に全国の市町村で国民健康保険事業が開始。「誰でも」「どこでも」「いつでも」保険医療を受けられる体制が確立した。1959年、安東は診療所を移転させる。のちに「三愛病院」が建設される場所で、地域医療の拠点を築き始める。

1960年代 1960年、大分市では多くの市町村が合併し、大分地区が新産業都市に指定されるなど、高度経済成長期として全国的に発展の目覚ましい時期であった。地域のニーズに応える事業拡大として、1968年、当時の診療所の地に「三愛病院」を建築。整形外科医・國東易徑(のちの國東整形外科理事長)を迎え、植田地域の医療の一端を担う決意を新たにした。

染症への積極的な対応に大きく舵を切る決断を行った。今思えばその経験が、この不安定な時代における三愛会の、今後の道筋を創り出したとも感じられる。

55周年はあくまで通過点の一つに過ぎないが、撮影時の2人の口からは、60年、100年後のこの地域の未来…そのための三愛会の使命と役割について、熱を帯びた言葉が多く発せられていた。

今回の法人広報誌では、「三三55周年記念誌」と銘打って、三愛会の55年とこれからの道を。

1970年 1970年に60床の病院として「医療法人社団三愛病院」が誕生する。安東有二郎、國東易徑の2名の医師を中心に始まった「三愛病院」は、これより植田地域住民の健康を見守る大きな拠点として、改めて歴史を紡ぎ始めた。それからすぐに、腎臓・透析・循環器の専門医である國東公明(のちの國東循環器クリニック理事長)が「三愛病院」に合流。血液透析室を開設した。当時は透析の施設は少なく、市内のみならず、多くは県南から患者が訪れた。この3名と、そのまわりを固める多くのスタッフたちが、その後の「三愛病院・大分三愛メディカルセンター」の礎を築いていく。

1979 半澤 邦が理事長に就任

1987 庄内診療所を開設(病床数19床)

1989 野津原診療所開設(病床数19床)
脳神経外科病棟を開設
(病床数140へ増床)

病院開設から10年、
大きな転換期を迎える。

1979年 イラン革命に端を発した、第2次オイルショックが起きた激動の年、1979年。三愛病院では、國東易徑医師が「国東整形外科」、國東公明医師が「国東循環器クリニック」を開設し、地域と「三愛病院」を新たな形で支える体制となった。6月、半澤一邦が2代目の理事長に就任。病院開設から約10年、「三愛病院」は大きな転機を迎えた。世界は混乱を極めていたものの、この出来事は、三愛のさらなる発展の始まりとなるものだった。「三愛病院」はこの年よりさらに、半澤一邦と数多くの優秀なスタッフのもと、地域の病院として活躍していく。

1994 わさだケアセンターを開設

1999 三愛病院は179床へ増床

2000 二次救急医療施設の指定
居宅介護支援事業を開始

「三愛病院」は
二次救急医療施設へ。

1994年 三愛会は設立以来、20年以上にわたり、植田近隣地域の健康を守る存在として力を注いできた。しかし、当時すでに叫ばれていた「高齢化社会」の波を受け止めるべく、医療のみならず、介護についても目を向けなければならなかった。1994年、「三愛病院」から徒歩数分の地に、「介護老人保健施設わさだケアセンター」を開設。看護・医療的管理のもと、介護やリハビリ、その他必要な医療や日常生活のサポートなど、さまざまな形で地域住民を支える体制が、また一つ強固なものとなった。

地域包括ケアに向けた事業展開



訪問看護ステーション・
椎迫サテライト



2000年代前半の航空写真
(2006年、この地に大分三愛メディカルセンターが新築移転)



わさだケアセンター(2004年当時)



2005年頃の野立て看板



在宅の支援を行う三愛会職員たちの様子



三愛の地盤を固めていく



庄内診療所外観



三愛病院周年・国東整形・国東循環器クリニック
落成記念(1979年)



1979年当時の半澤一邦



当時のリハビリテーションルーム



当時4階にあった喫茶室



増改築時の三愛病院



野津原診療所(現/のつはる診療所)開設時外観

1987年 「三愛病院」は1982年に100床に増床。さらに1987年、旧庄内町の要請をうけ、サテライトクリニックとして、庄内町柿原に「庄内診療所」を開設(外科・胃腸科・内科・整形外科、病床数19床)。当時「大分郡」であった庄内地域の医療をカバーした。

1989年 庄内診療所に続き、旧野津原町の要請をうけ、「野津原診療所」(現/のつはる診療所)を開設(当時は外科・胃腸科・内科・整形外科の診療科で病床数は19床)。現在も野津原地域の医療の第一線に立つ。

元号は昭和から平成に変遷し、時代の変化にあわせて、医療の形も大きく変わっていく。庄内・野津原のサテライトクリニックの存在と、さらなるニーズに応えるため、「三愛病院」は脳神経外科を開設。そして140床への増床を実行する。当時の職員数は約130名。延床面積4,703・18㎡の広さに、西病棟・東病棟に分かれて数多くの設備を備え、断らない医療を胸に平成元年の年を駆け抜けた。

『在宅』というワードが注目されはじめた時代。1996年には「在宅介護支援センター」を開設しているが、それに先立ち、在宅医療への足掛かりとして、「わさだ訪問看護ステーション」を、わさだケアセンター内に併設(現/三愛訪問看護ステーション)。訪問看護・訪問介護・訪問リハビリなど、在宅での医療介護は、2000年代になつてからもその重要性が議論になっている。当時より、三愛会は各事業所内での連携を強め、切れ目のない医療介護をめざし続けている。

2000年 2000年代に入り、「三愛病院」はいわゆる急性期病院としての役割を確立しつつあった。地域の救急医療の一翼を担う。この年、「三愛病院」は二次救急医療施設として指定され、24時間体制で患者を受け入れている。また「三愛会」としては、2000年の介護保

三愛病院から、学童施設に

2024年、旧三愛病院(現/有料老人ホームさんさん)の正面玄関であった場所に、「三愛学童アイ・ステッ」が大きく真新しいサインが貼り付けられた。コロナ禍以降の人手不足問題の深刻化をうけ、働き方改革などの施策の一つとして、法人内学童施設が誕生した。「医療介護従事者が、本心に安心して働ける」を追求した子ども預かり施設を実現。2025年現在、すでに職員たちからは好評で、預かり枠はいっぱいに。三愛病院のころには受付フロアであった場所に、今では子どもたちの笑い声が響き渡っている。



除創設と共に居宅介護支援事業を開始。「介護保険相談センターさんあい」を病院内に併設した。「住み慣れた地域」で最後まで過ごす、そんな地域住民の要望一つ一つを聞き取り、支援をつないでいった。

どうする？を、愛してゆく。

なにかあったら、集合。

この件、どうなった？ どうすればいい？ どうにかしよう。

ここには、真剣な顔があふれています。

そういえば たまに言われます。

「三愛のひとは、まじめですね」

確かに、そうだ。

いまどき流行るのでしょうか。

力をぬいて、気楽にいこう。

そんな時代な気がします。

ただここには、

「じゃあ やってみよう」

「変わっていこう」

そう理想に思い悩み、

汗を流しているひとたちがいます。

大変？ と訊かれたら、ええ、大変です。

でもやっぱりわたしたちは、ひとを支えるひと であるため、

毎日に問いかけつづけています。

なにも使命だとか、大げさなものでなく。

ただただ、ひとを思いやる。

きっと、それが好きなだけなのかもしれません。

2025年、三愛会、55周年。

「どうする？」を愛する、

まじめでひたむきな日々はつづきます。



社会医療法人三愛会55周年 Opening Statement

過去の写真と共に綴っています。

職員への想いと、患者さん・利用者さんへの想いを、

これまでの足跡を振り返り、

それに伴う記念動画を公開しています。

55周年記念ポスターと、

2025年9月より、社会医療法人三愛会は、



あなたの毎日は、愛らしい。

病院にしろ、介護施設にしろ。
あまり喜んで訪れる場所じゃありません。

どこか、寂しそうな顔でやってくる。あなたもそうでしょうか。

けれど、これまで懸命に生きてこられたあなたの人生が、
寂しいものでなんか あってはいけない。

医師は、日常に厳しい制限をかけるかもしれない。

看護師は、休んでなさいと叱るかもしれない。

栄養士は、好物を禁止するかもしれない。

でもその奥底にあるのは、
あなたのこれまでの懸命さに応える、わたしたちの懸命さです。

病気に、人生に、いのちに向き合う。
それはひたむきに、あなたと向き合っているということ。

その先にあるのは、つらく寂しい、でなく。

検査結果がちょっとよくなったり。

少しだけ痛みがやわらいだ気がしたり。

家族が会いに来てくれたり。

まだがんばれるかもと、自分を好きになったり。

そんな、ささやかな嬉しさで

彩られていてほしいのです。

2025年、三愛会、55周年。

なんでもない今日が、愛らしく映るように。

これからも、ごいっしょに。



社会医療法人三愛会55周年記念 Movie (YouTube)

2002	のつはる診療所を新築移転
2006	三愛病院は 大分三愛メディカルセンターへ
2008	大分DMATおよび 日本DMAT指定病院として認定 有料老人ホームさんさん さんあいヘルパーステーションを開設
2009	森義顕が院長に就任 大分県より社会医療法人の認可が 下りる
2015	三島康典が理事長に就任 半澤一邦（現〈会長〉）が顧問に就任

大分三愛メディカルセンターへ改称し、再開発地区へ新築移転。
2006年 病院開設から36年。社会福祉法人も設立し、地域の介護体制にも積極的に関与した。2000年代に入り、今のままの存在で本当に生き残れるのか、という議論が生まれ始めた。植田地域の人口増加は顕著であり、急性期医療の需要は今後も増える予想し、救急医療、そして特化した専門医療を2大柱として、地域完結型医療の一翼を担う方針を固めた。中長期計画を策定し、診療改革元年と位置づけた2006年、満を持して「大分三愛メディカ

2016	三愛総合健診センターを開設 消化器病・内視鏡センターを開設
2017	たばる事業所を開設
2019	三愛呼吸器クリニックを開設 大分三愛メディカルセンターは 190床に増床

大分三愛メディカルセンターは過去最大の190床に。
2016年 医療業界で叫ばれるワードの中に、「末病」「健康寿命」といったものが出現してきた2000年代。大分三愛メディカルセンターでは、「健診」による疾患の早期発見・早期治療が一つの鍵になると考え、2016年、病院併設型の健診施設「三愛総合健診センター」を開設。地域の健康増進を担うと共に、健診率向上にも寄与していった。健診受診率の低迷が問題視されるなか、最新の機器を準備。また、男女別フロアの設置や、女性スタッフによる対応重視など、より気軽に受診できる体制を実現している。

切れ目のない連携で、人を支えていく



三愛総合健診センター・内視鏡室



三愛呼吸器クリニック
リハビリルーム



三愛呼吸器クリニック開設時スタッフ

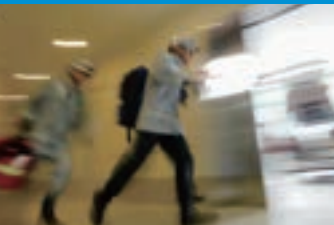


竣工間近の三愛総合健診センター

新たな地、新たな役割、新たな風



のつはる診療所新築移転式典



DMAT出動時



有料老人ホームさんさん
さんさんヘルパーステーション
(旧/三愛病院)



災害現場での救助活動



大分三愛メディカルセンター（2005年建設時）

2019年 植田・田尻近辺には、呼吸器を専門とする診療所がなかった。地域からの呼吸器疾患に関するニーズに応えるべく、三愛会に新たなクリニックが誕生した。「三愛呼吸器クリニック」では、「リハビリ併設型呼吸器専門クリニック」を掲げ、呼吸リハビリテーションに特化。最新の機器と最新の治療法を常に求め、三愛会各事業所との連携で、患者をトータルにケアしている。

医療・介護業界の動向の変化は、年を追うごとに激しくなり、病院もそれに対応していかなければ生き残れなくなる時代。「大分三愛メディカルセンター」では、地域包括ケアシステムの構築による充実した入院体制を整備するため、約20年ぶりに病床を増加させ病棟を再編。安心した医療体制を追求

2017年 田原地域周辺の医療・介護の拠点であった「善和会」の事業を継承。田原拠点としてクリニック・介護老人保健施設・グループホームの3つの事業所を開設した。「大分三愛メディカルセンター」をはじめ、三愛会の事業所との連携により、さらに広い地域の健康・日常を守り続けている。

2009年 2009年6月、森義顕が院長に就任。標榜診療科も21を数え、病院新築後も順調に医療体制を構築し、救急搬送件数も、このころには1,500件前後に増加していた。この年の11月、「救急医療、災害医療」

旧三愛病院を改築する形で誕生したのが、有料老人ホーム「さんさん」である。それに併設する形で、介護保険の中核を担い、訪問介護を行う「さんあいヘルパーステーション」が開設された。高齢化問題と共に不安視される、認知症患者の増加の問題。連携する事業所を増やすことで、三愛会は地域包括システムの構築に一躍買い、発展を続ける。

2008年 救急科専門医の招聘などを経て、ER救急での対応やDMAT（災害医療チーム）の活躍により、大分DMATおよび日本DMAT指定病院の認定を受ける。当院のDMAT隊員は、のちに東日本大震災、熊本地震、能登半島地震においても現地入りし、被災者のサポートを行っている。

し、地域包括ケア病棟を11床増やし、過去最大の190床となった。

社会医療法人三愛会、そして社会福祉法人三愛会の事業所で、健診による予防、病院・診療所を主とした医療、さらに介護へとつなぐ。切れ目のない連携で、植田地区の地域包括ケアを実現するために、スタッフ全員が全身全霊を傾けながら、地域を支えている。

2015年 約36年もの間、2代目理事長を務めた半澤一邦が退任（現〈会長〉）。3代目理事長に三島康典が就任した。21世紀に入り、2006年の新築移転を経て、さらなる時代の変遷が目まぐるしく繰り返されるなか、三愛会に新たなリーダーが誕生した。すでに三愛会は45周年の年。次の時代に向け、設備、システム、そして人材も日進月歩で洗練されていく。

2013年 現状の近隣地域の医療体制を鑑み、「脳外科」「消化器外科・内科」「整形外科」を3本柱にし、救急への特化をめざす。これら3本柱をセンター化するとし、2013年9月には脳卒中センターが開設。最新の脳血管内治療などにも積極的に取り組み続けている。

の要件を満たし、三愛会は社会医療法人化を果たした。1970年の三愛病院開設以来、「断らない医療」をモットーに地域の駆け込み寺的な役割を担ってきた「大分三愛メディカルセンター」が、「社会医療法人三愛会」として再始動した瞬間だった。

2020	2024	2025
コロナ禍のはじまりと 法人設立50周年	たばるクリニック病床の運営を開始 学童施設の運営を開始 中山尚登が病院長に就任	三愛会設立55周年を迎える

感染症対策を経験し、
より強い結束力・連携力を得る。

2020年 「原因不明の肺炎が発生している」。中国から端を発した新型コロナウイルスは、瞬く間に全世界へと流行し、大分県へも侵入してきた。理事長・三島康典、院長（当時）・森義顕の判断のもと、大分三愛メディカルセンターは「発熱難民を出してはいけない」との想いで、発熱外来や入院受け入れなど、可能な範囲の対応は、すべて行ってきた。流行初期の段階でクラスターとなり大きく報道されたのも、最前線で闘っていたからこそだろう。多くの犠牲の上での感染症対応は、その後の病院運営、働き方改革、医療介護への使命感など、実は多くの良い効果も生み出している。コ



編集後記

写真は、2025年度の三愛会の新卒職員たち。入職から4カ月の研修の後、一部のスタッフに残ってもらい、三愛会の過去の資料を見せていたその一場面です。

上司、先輩たちの若い頃の写真を発見すると、仲良くなじやきながら歓声を上げていました。毎年似たようなことを言っているのかもしれませんが、「今年の新人たちはみんな、明るく爽やかで、それでいて勤勉だ」と、よく耳にします。

三愛会の過去を楽しそうに顧みる彼と彼女たちに、三愛会の未来を見たような気がしました。

本誌内で何度も述べましたが、社会医療法人三愛会は地域の

つないでいく。

皆さまと共に、55年の道のりを歩んできました。そして、数多くの職員と培ってきた歴史でもあります。

患者さん、利用者さんや関係各社の方々も含め、これまで少しでも関わってきていただいた皆さまに、まずは感謝を申し上げます。

しかし周年というのは、あくまで通過点でもあります。やはり向くのは前であり、それは植田地域全体の未来のことでもあります。ゴールといえるものは、見えていくわけではありません。だからこそこ私たちは結局、今まで通りに、ただただひたむきに。今日、明日、明後日と、地域の医療介護を支えていくだけな

のだなと思うのです。

バトンを手渡すように、たくさん目の見えないものをつないでい。

ちよっとだけ立ち止まり、そういった想いを確認していくような、これが三愛会の55周年です。

地域の皆さまにおかれましては、これからも変わらなく、60年、70年、100年と…同じ景色に立ち、同じ未来を描きながら、一緒に歩みを進めていただければ幸いです。

新型コロナを乗り越え、通過点を越えて



2024年7月、新院長・副院長による新体制



プレハブ内でのPCR検査



感染制御を指示する大分三愛メディカルセンターのスタッフたち



たばるクリニック病床運営開始



コロナ禍での救急診療

ナ対応を踏まえ、三愛会はより強い結束力・連携力を得たと自負している。今では「コロナ」は一般的に話題にならなくなりつつあるが、医療現場での感染症対応は延々と続いている。

2024年 コロナ禍での経験を踏まえ、多くのアイデアが生まれた。この年は、医療介護従事者のさらなる「働きやすさ」を踏まえた、学童施設「アイ・ステップ」を地域全体を巻き込む形で開設。6月には、たばるクリニックの病床稼働を再開させ、医療介護の連携の流れをさらに円滑に行える体制を再構築した。7月には、大分三愛メディカルセンターで15年院長を務めた森義顕が院長職を退任。中山尚登をはじめとする新たな執行部体制を敷き、アフターコロナと呼ばれる時代を見据え、植田地域の未来に向けて新たな一歩を踏み出した。

2025年 それから1年、2025年は55周年。三愛会の職員一人ひとりの想いと共に、そしてまた地域と共に、これからも社会医療法人三愛会は、激動の時代をまっすぐ歩む。

地域と、共に

大分三愛メディカルセンターを中心に、『地域の医療法人である』と事あるごとに口にしてきました。地域の医療介護を守る…というのが当たり前ですが、地域の皆さまに「楽しみ」を提供するのも役割です。2025年、実に6年ぶりに「春の健康まつり」を実施。これは1995年から続く健康増進事業の一貫として、来場者の健康チェックや、子どもたちには薬剤師体験、救急車乗車体験などを提供しています。近年でも、一流アーティストたちの演奏、著名人のトークショー、介護施設での夏祭りなど、さまざまな形で、地域の笑顔を追求しています。

